

雛人形の飾り方

JJ1SXA/池

お雛様の飾り方を一寸調べて見ました、選んだのは一番豪華な七段飾りです、一段目というのは七段の最上段のことで、以下順次下段に向かって数えるのですね、普通、階段は、最下段が一段目で、順次上に行くに従い段数が増えます。

先ず一段目、ここには男雛(お内裏様)と女雛(お雛様)です、ここで、関東雛(全国的に販売されている雛人形の九割に当たる)の場合は、男雛は向かって左側、女雛は向かって右側に飾ります、京雛(残りの一割に当たります)の場合は、これとは逆に、男雛は向かって右側、女雛は向かって左側に飾ります。

男雛・女雛の後ろには金屏風を立て、両脇に雪洞(ぼんぼり)を置き、男雛と女雛の間には、お神酒を載せた三方を飾ります。

男雛は冠をかぶって手に笏(しゃく)を持ち、左脇に刀を差します、女雛は、檜扇(ひおうぎ)を綺麗に広げて手に持たせます。

二段目には、三人官女を並べます、三人官女は一人だけ座っている官女がいる場合は、座姿の官女を中央へ置き、両側の官女が立つ配置にします。

まれに座姿の官女が2人で、立姿の官女が一人という雛飾りがありますが、その場合は立姿の官女が真ん中で、両側に座姿の官女を置くようにします。

中央の官女が三方(京都風では島台)を持ち、向かって右の官女が長柄鉾子(ながえのちょうし)、左が加鉾子(くわえのちょうし、提子・ひさげ)を持ちます。

立姿の官女を右か左のどちらにおいていか分からなくなった場合は、それぞれの左手を見ます、左手の指が伸びているのが向かって左側、左手の指が物をつかむように曲がっているものが向かって右側となります、なお、三人官女の一人が、年長者を表して眉を落としていたり、お歯黒であったりすることもあります、三人官女の間には高坏(たかつき)を置き、お餅などを飾ります。

三段目には、五人囃子を並べます、この段には、関東では能楽の地謡と囃子方を並べますが、関西では雅楽の楽士を並べる場合もあり、五人囃子は通常、子供のようにあどけない顔に作られていて、雛段に生き生きとしたかわいらしい雰囲気を持たせています、並べ方は、向かって右から謡い(うたい)・横笛(よこぶえ)・小鼓(こつづみ)・大鼓(おおつづみ)・太鼓(たいこ)の順で、「左へ行くほど音の大きい楽器になってゆく」と覚えると忘れにくくなるようです。

四段目には、隨身の一对を並べます、隨身とは御所の警護の武官を指しますが、雛壇飾りでは矢大臣(もしくは右大臣・左大臣と俗称で呼びます、この隨身の右・左は内裏雛から見た位置になります、したがって向かって右が左大臣、左が右大臣になります、左大臣の方が格上なので老人の姿をしており、右大臣は若者の姿です、隨身は左手に弓、右手に矢を持ち、矢を入れた胡籙(やなぐい)を背負います。

五段目には、仕丁の三人を並べます、泣き、笑い、怒りという三つの表情で作られていることが多いので、「三人上戸」とも呼ばれます。

仕丁は御所の雑用を司る者たちで、持ち物は向かって左から台笠(だいがさ)、沓台(くつだい)、立傘(たてがさ)となります。

関西(京都)では箒、塵取り、熊手を持ちます、ただし、どの人形が何を持つかは特に決まっていません。

仕丁の左右には「桜橘(さくらたちばな)」を飾ります、この樹は、実際に京都御所の紫宸殿(ししんでん)の御庭に植えられているもので、「左近の桜(さこんのさくら)・右近の橘(うこんのたちばな)」と呼ばれます、段飾りの左・右は内裏雛から見ての左右ですから、飾る場合は名称とは逆に、向かって左に橘、右に桜を置きます。

六段目は、箆笥(たんす)・長持(ながもち)・挟箱(はさみばこ)・鏡台(きょうだい)・針箱(はりばこ)・火鉢(ひばち)・衣裳袋(いしょうぶくろ)・茶の湯道具(台子・だいす)など、大名格の武家で使われていた室内用品になっています。

七段目は中央へ重箱を置き、左右に御駕籠(おかご)と御所車(ごしよぐるま)を配します、厳密な決まりはありませんが、通常は向かって左に御駕籠、右に御所車が置かれるようです。



子供はいない、当然孫もない、雛人形は縁遠い存在だが… (2022年3月記)